

『世界画報』復刻への期待

成城大学教授 森 暢平

『世界画報』は戦前・戦後の日本において、グラフ誌として大きく成功した雑誌である。写真を中心とするグラフ誌といえば、『アサヒグラフ』『毎日グラフ』が、発行元が大手新聞社ということでは有名だが、国際情報社の『世界画報』は、同社の主力刊行物『国際写真情報』とともに大きな影響力を持っていた。それがほぼ忘れられてしまったのは、直販制という特殊な形態で流通し、公共図書館に残りにくかったためである。その復刻は、戦前・戦後の日本がどう描かれていたのかを知るうえで極めて重要である。

国際情報社が、『国際写真情報』に加え、『国際写真タイムス』の発行を始めたのは一九二四（大正一三）年である。これが一九二八（昭和三）年一月号から『世界画報』と改題された。『国際写真情報』より価格を低く設定し、グラフ誌のさらなる大衆浸透を目指した。しかし、国際情報社は、一九四五（昭和二〇）年五月の二回目の東京大空襲で、本社及び印刷所を失い、『国際写真情報』『世界画報』は休刊のやむなきにいたった。

本社を失った国際情報社の社長石原俊明が戦後、事業を復活させるのは一九五一（昭和二六）年五月である。まず、『国際写真情報』を復刊し、翌年五月から『世界画報』を復刊した。

繰り返すが、国際情報社が成功したのは、書店を通じない直接販売という方法によってである。主に県ごとに置かれた支局、および特約販売店が読者に届ける形であった。特約販売店は最盛期にはおよそ四〇〇店があったとみられる。今回配信される号には、奥付脇の「本誌取扱者」の欄に「国際写真情報社釜石支局 菅原豆腐店（釜石市中妻宝町）」「国際情報 知多支局（尾張大野）」「弘前市東和徳町 国際情報社東北総局直轄弘前出張所」などのゴム印が押されている。直販制、特約店の実態がうかがわれ、興味深い。

一九五五年前後、直販制を取る画報誌は、国際情報社の二誌だけでなく、『国際文化画報』『世界文化画報』『時事世界』のライバル三誌もあった。朝鮮戦争を背景にした好景気、いわゆる朝鮮特需で日本は潤い、情報を欲する読者層が増大したため、過大な競争を上回る需要があったと考えられる。

スマートフォンで簡単にカラー写真が撮影できる現代人には想像が難しいが、ビジュアル中心の画報誌、とくにカラー印刷（当時は天然色と言った）が定評の世界情報社の印刷物は、読者に大きなインパクトを持っていた。テレビが家庭に広く普及する以前、すなわち一九六五年前後まで、世界のリアリティを大衆が感じる重要な媒体であったのである。「読者の声」欄には「美しい天然色の外国の風景それから国内の主な政情……私の知っている方は『ラジオを聞くよりか、この本のほうが写真も出るし、はつきりわかるわね』と云っていました」（一九五三年二月号。社会に出る前の女学生と思わる人物の投書）という声が寄せられているが、これが当時の読者の実感なのである。

読者の感想として代表的なものをもう一つ挙げておく。「世界画報をこの半年ばかり前、義理

で買わされましたが見てゆくうちにその内容の豊富なのに驚き近頃では月々、配本になるのが待ち遠しく感ぜられる様になってしまい、どうしてもっと早く此の画報を買わなかったのかと悔やまれる位です。刺激の少い田舎に住む小生にとっては居ながらにして世界の有様を知ったり、有名な絵などを紹介してくれる世界画報は煙草銭にかえても将来永く愛読したいと思っています」(一九五三年一月号「読者の声」欄。福島県信夫郡の男性の投書)

一九五三年一月号でみると、巻頭にオフセット印刷の二枚、次に折り込みページ一枚が差し込まれ(ともにカラー)、それ以降写真版ページが始まり(計二六ページ、うち二ページはカラー印刷)。それ以降はグラビア写真ページである(計一四ページ)。日本経済が急成長するのに伴い、ページ数は増加していく。各号に上部二カ所、下部二カ所の四つの穴が開いているが、事前に配布される綴り込み帳に閉じ込んでいくための便宜のためである。

内容をみると、安藤広重の東海道五十三次の浮世絵、世界の名画が紹介される巻頭カラー印刷、封切された日本映画・外国映画の紹介ページ、科学トピックのページが毎回ある。新派演劇・歌舞伎など舞台の紹介が必ずなされるのも大きな特徴だ。文化・芸能、そして芸術が大きな売りだったことが分かる。政局もの、皇室ものなども注目度が高く、各号に頻出する(一九五三年六月号から一十一月号は「皇太子御渡欧特集」だった)。

人気シリーズもあった。一つは、「社会科探訪シリーズ」だ。中央气象台(現在の気象庁、一九五八年一〇月号)、東京中央郵便局(同年一十一月号)、東京駅(一九五九年一月号)、東京市外電話局・国際電話局(同年二月号)、国会図書館(同年三月号)などで、各組織の知られざる裏側を紹介した。「大学めぐり」も、学生の実相を紹介する連載として有名だった。慶応義塾大学(一九五四年四月号)、早稲田大学(同年六月号)、東京芸術大学(同年七月号)、東京女子医科大学(同年九月号)などである。「自衛隊めぐり」も「再軍備」が批判されるなか、自衛隊のありのままを、やや批判的な視点を含めながら紹介した。静岡・浜松の航空自衛隊整備学校(一九五四年一〇月号)、陸上自衛隊練馬駐屯地(同年一十一月号)、陸上自衛隊富士学校(一九五五年三月号)などである。「日本の風景」と題した連載もあった。厳冬の剣岳(一九五五年二月号)、宮島(同年五月号)、長崎(同年六月号)、永平寺(同年七月号)などである。

写真は、A P、U P Iなどの外国通信社による海外写真、国際情報社写真部が撮影した国内写真など、政治、文化、社会、風俗など多種多様なものが詰め込まれている。『「世界」画報』を名乗るだけに外国物が多い。朝鮮戦争、インドシナ戦争など騒乱の現場に迫っているものもある。一九五三年五月号の「北鮮軍のキャンプを訪ねて」は、中国人民義勇軍と朝鮮半島の現地の人たちの交流を描いた珍しい写真(撮影はアジャ通信)である。国内写真は、通信社によるものを除くと、ほぼ、国際情報社直属カメラマンが撮影していたようだ(一九五四年六月号「読者の声」欄への編集部回答)。

以下、第一回配信分で筆者が目をつけた記事、写真を挙げていく。

◇東京の地下動脈・四八億の工事は進む（一九五八年一月号）

当時、新地下鉄線と呼ばれた現在の丸ノ内線（池袋―御茶ノ水間）の建設ルポ。道路を切り開き、人力のトロッコで土を運びだす様子、池袋東口が急速に発展していく様子が分かる。

◇ちかごろ東京のバーレスク（一九五八年二月号）

都内に一六軒あったというストリップ劇場のルポ。銀座にある高級ストリップ劇場ではクリスマス興行「ろうそくショウ」が、銀座C劇場では「アナタハンの真相」という小劇が、事件の当事者比嘉和子が出演して演じられたことが撮影される（「C劇場」は、銀座コニーバーレスク劇場だと思われる）。

◇メーデーに甦える右翼――「殉国青年隊、愛宕山に集結」（一九五八年六月号）

五月一日のメーデーの日に、労働団体などの左派に対抗するため、東京・芝の愛宕山に集結した右翼の面々を「甦える」という視点で撮影したもの。「女と子供をソ連の侵略から守れ」「メーデーを粉碎し生産復興に起て」などと書かれたのぼり旗や、木刀で武装したメンバーの強面さが当時の右翼の実態を示している。

◇モンテンルパより懐しの故国へ――遺骨十七柱も共に（一九五八年九月号）

フィリピン・モンテンルパの刑務所に戦犯として服役していた百人余りが帰国した際の写真。前年、渡辺はま子、宇都美清の「あゝモンテンルパの夜は更けて」が大ヒットし、注目を浴びていただけに横浜港に大勢の群衆が集まっていたことが分かる。帰国した元服役囚が杖を手にした高齢の母の肩を抱いて歩く姿がみる者の胸をえぐる。

◇夏の銀座カメラスケッチ（一九五八年九月号）

モンテンルパの記事と同じ号に掲載され、その対照が印象的な東京・銀座の風俗の写真。若い女性たちが流行の服装で街を闊歩している。「瓦礫の山であつた銀座が八年後の今日一応この盛況を取戻した」「パリのシャンゼリゼに劣らない様に洗練されるまでにはまだ大分先があるようだ」などと記述される。

◇孤児「奄美」遂に帰る――復帰を喜ぶ島民の近況（一九五四年二月号）

一九五三年一二月二五日に日本復帰を果たした奄美群島の現地ルポ。「琉球政府奄美地方庁」の看板が「鹿児島県大島支庁」に架け替えられる様子、「晴れて日本の中学生だ」「勝利の時ぞ今」などプラカードを持ち名瀬市内を行列して歩く人々などが印象的。

◇女も度胸――オートレースに女性も進出（一九五四年五月号）

千葉の船橋オートレース場での女性オートレーサーに対する取材。女性だけのレースが関東地方で初めて開催されたという。

◇特報 アジア民族の祭典――日本各種目に圧倒的強みを発揮（一九五四年六月号）

第二回アジア競技大会（フィリピン・マニラで開催）で、日本は二四個の金メダルを獲得した。とりわけ女子選手の活躍が目立った。大会は五月九日に終わったが、PANA通信からの写真が届いたのは締切後だった。編集・印刷作業を一時中断し、徹夜で記事を書いたうえ印刷し、六月一日発行に間に合わせたという（翌七月号「読者の声」欄への編集部回答）。

◇小坊主念仏（一九五四年七月号）

東京・中目黒のY寺（祐天寺のことだと思われる）における住職の息子（八歳、五歳）の修行の

様子。お経の途中であくびをしてしまう子供がかわいらしい。

◇函館湾に未曾有の惨事!! 強風に洞爺丸転覆、千余名一瞬にのまる（一九五四年十一月号）

九月二六日、国鉄が運航する青函連絡船「洞爺丸」が台風で沈没した事故。死者・行方不明者合わせて一一五五人という日本海難史上最悪の事故の報告（写真は、北海タイムス社撮影）。海岸に打ち上げられた遺体そのまま掲載され、生々しい。

◇国産車に春の訪れ 政変が投げかけた思わぬ波紋 新型乗用車登場、性能も外車並みに（一九五五年三月号）

前年の鳩山一郎内閣誕生で、国産車愛用の流れをつくるため「官庁用の外車廃止」の方針が打ち出され、国内自動車メーカーは、性能に劣るとされていた乗用車の新型発表に力を注ぐ。「オオタ」GP型など、その後消えてしまったメーカーの新車も紹介される。

◇プロレスばやりが産んだ恐るべき少女たち——ベビーレスラー誕生（一九五五年五月号）

米国の女子プロレス団来日がきっかけとなって女性プロレスラーが増えている。全日本プロレス協会には小学校五年生の女兒二人が入門し、浅草のストリップ劇場で興行している。

◇浅草の双子姉妹——紅燈の街に三昧の音がす二人の少女の物語（一九五五年六月号）

浅草の飲み屋などで三昧線の流し業に従事する北海道生まれの一六歳の双子姉妹の物語。街に出たのは一歳のときで、美空ひばりから、江利チエミばりのジャズまで歌いこなすという。当時無名であった二人はのち「こまどり姉妹」として一九六一年の紅白歌合戦に初出場するなど有名になった（紅白は七回連続出場。二〇二五〔令和七〕年、日本歌手協会から功労賞を贈られた）。

◇「大学めぐり」シリーズ第一三回 学習院大学——広く開放された門戸（一九五五年六月号）

シリーズものの大学紹介だが、学習院大学のこの回は、当時聴講生であった皇太子（現・上皇）のスナップ写真が何気なく掲載される。撮影を依頼するとあっさりポーズをつけてもらえたという（「編集室の窓」欄）。

総じて言えば、日本という国が貧しさを脱却し、経済大国へと発展していく様子がリアルに活写されている。メディア史の研究者でもこの雑誌を知る者は多くはない。たくさんの人たちに復刻版が利用されることを期待したい。